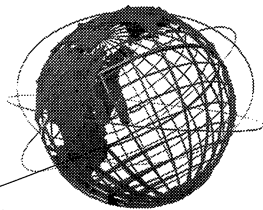


## 山形辰史

Yamagata Tatsufumi

1963年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業、ロチェスター大学大学院修了 (Ph.D.)。現在、日本貿易振興機構アジア経済研究所開発研究センター開発戦略研究グループ長。著書：「開発経済学 貧困削減へのアプローチ」(共著、日本評論社)、「やさしい開発経済学」(アジア経済研究所) ほか。



## 違いを楽しむ

### —オリンピックと国際協力

## ●オリンピックが終わって

オリンピックを見ていてふと我に返ることがあった。自分はなぜ日本人選手ばかり応援しているのだろうか、と。自分の中にはそれほど強い国粹主義が眠っているのだろうか。しかし、日本人を応援するのは私ばかりではないように思える。サッカーのワールドカップやオリンピックとなると日本の多くの人々が日本チームや日本人選手を応援する。それは日本人の関心や嗜好が内向きになっていることを示しているのだろうか。

そしてこの傾向は、日本の新しい援助大綱策定の際に「これからの日本の政府開発援助 (Official Development Assistance: ODA) はもっと日本のためになることを意図したものになってよい」とする論調の高まりと軌を一にしているようにも見える。日本人は一時の国際化指向を弱め、外国人のことが日本人のことが大事だと思ふようになったのだろうか。

## ●感情移入のメカニズム

それは言い過ぎだろう、と私は思う。自分の胸に手を当てて考えてみた。すぐに気づいたことは、私は他国の選手をまったく応援しないわけではない、ということである。周囲の目など気にせず奇声を発しながらバーベルを差し上げる重量挙げ選手、スタイル抜群で表情も変えずにスパイクを打ちつづけるバレーボール選手、途中まで先頭を走っているながら暴漢に襲われて泣きながらコースへと戻ったマラソン選手などは、外国人ではあるけれども、彼らが出場する試合をもう一度見るとき、おそらく私は日本人を応援するのと同じように彼らを応援するだろう。なぜなら既に私は彼らに感情移入してしまっているからである。一度彼らの立場に身を置いて考えることを経験すると、彼らの成功や失敗がなんだか他人事ではなくなるので



セネガルに生えるバオバブの木

ある。

この仮説はわれわれが日本人選手を応援する傾向が強いことをも説明する。われわれは多くの日本人選手の、これまでの努力や挫折や成功をよく知っている。だからこそ、自分たちの代表であるという思いと相まって、外国人選手より余計に応援したい気持ちが強いのではないだろうか。

一方ODAの内向き指向は多分に近年の景気低迷を強く懸念する人々の意向を反映したものと考えられる。日本人が以前より日本びいきになり、外国嫌いになったとまで考える必要はあるまい。

## ●日本にない良さ

そもそも経済学において「人々は多様性を好む (love of variety)」と仮定されることが多い。典型的な無差別曲線が原点に対して凸とされる所以である。これに従えば、人は自分が慣れ親しんだものに飽きたらず、それまで知らないものをどんどん求めつづけそうなものである。しかし実際には多くの人が「知れば知るほどもっと知りたくなる」というように何かへの興味を深めていくことに熱心であって、興味の対象を広げることは二の次にされているように思う。外国のこと、ましてや発展途上国のことなど知りたいと思う人が少なくとも不思議ではない。けれどもそれは、まだ多くの人が発展途上国の物品や生活、人々の良さを知らないからではないだろうか。

そこで、私が感じる発展途上国の良さを読者に伝たいと思う。まず日本では得難い食材を挙げてみよう。タイ東北部やその周辺国で捕れる雷魚は煮ても蒸しても美味である。アフリカのいくつかの地域でみられるバオバブという木はサン＝テグジュペリの『星の王子さま』に登場することで知

られているが、バオバブの実実は内部が肌色で、それを水で溶くとカルピスのような甘酸っぱいヴィと呼ばれる飲み物になる。熱帯の果物であるマンゴー、マンゴスチン等の美味しさについては改めて述べるまでもない。椰子の実ジュース、砂糖黍ジュースも味わい深い。

発展途上国の風景も魅惑的である。熱帯の黒々とした入道雲は人を圧する迫力がある。激しいスコールは、防水された室内から見上げる限り、見ていて飽きない。視界一面に広がる空の下の田圃がすべて洪水で浸されている眺めは、それによって人々に生じる利害を忘れさせるほど壮大である。

人々の日々の営みも美しい風景を構成する一要素である。またその個々人を取っても、情け深い人、人懐こい人、物静かな人、剽軽な人、思慮深い人、美しい人がどの地域にもいるものである。もちろんその代わりに、意地悪な人、他人を食物にしようとしている人、妬み深い人、口うるさい人もいるものであるが。

## ●違いを楽しむ

近年のODAに関わる意見の典型である「日本人の税金は日本人のために使われて当然だ」という主張は、安全保障の範囲を「税金が徴収される地域」に狭めてしまっている。つまり、国内の災害の被災者に税金を使うことに異存はないが、海外のそれにはできる限りの対応に留める、というわけである。しかしそもそも通常の国の所得税は累進的になっているので、相対的に所得の高い人が所得の低い人に資金を回すという思想は誰しもが受け入れている。その発想を拡張して、所得の高い国が低い国に援助するのは自然ではないのだろうか。

その発想が受け入れられにくいのは、おそらくは、多くの日本人にとって発展途上国やそこに暮らす人々が未知だからだと思われる。ほとんどの日本人は発展途上国出身の友達がいない。したがって彼らの豊かな文化、固有の歴史、故郷の風景を想像する材料を持たない。

そこで私は伝えたい。文化や自然条件の違いに気づかされるのがいかに楽しいかを。そして違う社会に暮らす人が自分と同じ表情をするのを見出すことがいかに心躍るものであるかを。